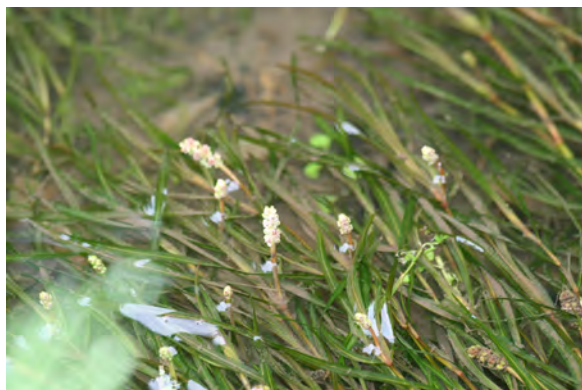




②⑤ ヤナギモ



②⑥ コカナダモ



①⑨ キツネノカミソリ ヒガンバナ科 花期7月 高さ30~50cm

ヒガンバナの仲間、春に出た葉は夏に枯れ、葉が枯れてから黄赤色の花が咲く。細長い葉の形をカミソリに見立て名がついた。滝不動のお堂の西の水路の崖ぎわに咲く。

②⑩ ウワミズザクラ バラ科 花期4~5月 落葉高木 高さ15~20m

サクラの仲間だが花は葉が出てから咲き、白い小花を穂状に付ける。実は8~9月に赤から黒に熟して食べられ、果実酒にすると香りと色がきれい。

②⑪ チャノキ ツバキ科 花期3~5月 常緑低木 高さ2m 外来種

お茶の木の事で水路に沿って所々にある。ツバキの仲間、秋半ばに白い花が咲き黄色の雄しべが目立ち、実は球形で熟すと褐色になる。東南アジア原産で奈良時代に帰化。

②⑫ アオキ アオキ科 花期10~11月 常緑低木 高さ2~3m 雌雄別株

葉は厚く深緑色で光沢がある。実は15mmくらいの楕円形で冬から翌年春に赤く熟す。

②⑬ シロダモ クスノキ科 花期10~11月 常緑高木 高さ10~15m 雌雄別株

葉は3脈が目立ち、裏は白く揉むと防虫剤の香りがする。実は翌年の花期に赤く熟す。

②⑭ カジノキ クワ科 花期5~6月 落葉高木 高さ4~10m 雌雄別株

クワに似るが葉が厚く軟毛が目立つ。和紙の原料に栽培されていたものが野生化。実は夏に熟し、橙赤色球形で甘い。

②⑮ ヤナギモ ヒルムシロ科 花期6~9月 水生常緑

流れのある水中に幅2~3mm、長さ5~10cmの細長い葉を茎にたくさん付けて生え、小さなツクシのような形の花穂を水面から立ち上げる。

②⑯ コカナダモ トチカガミ科 花期4~5月 水生常緑 外来種

水中に生え、小さな葉が節ごとに3枚付き、水中に白い花が咲く。北アメリカ原産。

4. 高麗川に沿った土手の道

⑳ シャクチリソバ



㉑ マメグンバイナズナ



㉒ オニグルミ (雄花)



㉓ クサノオ



㉔ ツルマンネングサ



㉕ ヘラオオバコ



㉖ アレチウリ



㉗ タコノアシ



③⑤ ガマ



③⑥ アシ



土手の道や耕作地跡は乾燥が進み、乾燥に強い外来種が根付いて数を増やしています。高麗川沿いには湿地を好む草木が繁り、春は新緑と黄色のからし菜の花の景色が楽しめますが、夏の河川敷はオオブタクサなどがはびこります。

②⑦ シヤクチリソバ タデ科 花期 5～10月 高さ 1～1.5m 外来種

水辺に生える大きく育つソバの仲間で白い花をたくさん付ける。ソバより後に日本に入ってきて野生化している。実はソバとして食べられる。中央アジア原産。

②⑧ マメグンバイナズナ アブラナ科 花期 5～6月 高さ 20～50cm 外来種

道端に生えナズナに似た白い小花を付ける。ナズナの種子は三角形だがマメグンバイナズナの種子は軍配型をしている。北アメリカ原産。

②⑨ オニグルミ クルミ科 花期 5月～6月 落葉高木 高さ 7～10m

川沿いに生え、同じ木に雌花と雄花が咲く雌雄同株。雌花は枝先に立ち、雄花は 10～20cm の房状で長く垂れさがる。緑色の厚い果肉の中にかたい種子がある。

③⑩ クサノオ ケシ科 花期 4～7月 高さ 30～80cm

草地に生えて黄色の花を付ける。茎や葉を折ると黄白色の有毒の液が出る。

③⑪ ツルマンネングサ ベンケイソウ科 花期 6～7月 つる性 外来種

茎は地面を這って土手の斜面に広がり、一面に黄色い花を付ける。朝鮮、中国原産。

③⑫ ヘラオオバコ オオバコ科 花期 6～8月 高さ 20～60cm 外来種

オオバコの仲間だが葉が細く、長い花茎を伸ばし先端に花を付ける。北アメリカ原産。

③⑬ アレチウリ ウリ科 花期 8～9月 つる性 外来種

葉はキュウリと同じ形で、つるを横に這わせ他の植物を覆う。北アメリカ原産。

③⑭ タコノアシ(国NT、県VU) タコノアシ科 花期 8～9月 高さ 30～80cm

湿地や休耕田に生え、花や種子の付き方が吸盤の並ぶタコの足に似る。花は黄白色だが種子が熟すとゆでたタコのように赤くなる。

③⑮ ガマ ガマ科 花期 6～8月 高さ 1.5～2m

滝不動は水田跡の湿地に生え、花穂は赤褐色。「因幡(いなば)の白兔」の話にでてくる。

③⑯ アシ イネ科 花期 8～10月 高さ 1.5～3m

別名ヨシともいい、沼や川岸などの水辺に生え、地下茎でつながり群落をつくる。

コラム 多和目のヒガンバナ

秋のお彼岸には必ず咲き、花が終わると葉が出て、冬の畔で日差しを独り占めします。中国原産の「史前帰化植物」つまり奈良時代以前、日本の歴史が始まる前に大陸から渡来した植物と言われています。葉に粘液がありイモなどを包み鮮度を保つ梱包材として稲などと一緒に持ち込まれたのではと考えられています。明治中頃には実際にミカンの梱包に使われていました。

ヒガンバナは遺伝的に種子ができないのはよく知られていますが、どのようにして日本中の野山に広がったのでしょうか。ヒガンバナは鱗茎つまり球根が分けつして増えていきます。球根は分けつすると、土の乾燥などで地面から浮き出て畦から転がり易くなり、雨が降ると水路に落ちて下に流れて根付き増えていきます。滝不動の西の多和目の水路に列をなして咲くヒガンバナはとても情緒ある風景です。



石仏とヒガンバナ



水路のヒガンバナ

ヤナギの話

ヤナギは柳と書きます。一昔前までは柳と言えば「銀座の柳」「川端柳」「幽霊の出る木」を連想し、今でも枝を垂れる「枝垂れ柳」をヤナギの全てと思っている人が多いようです。けれども日本には 50 種ほどのヤナギがありますが、枝が垂れているのはシダレヤナギだけで、他はどれも枝を上や横に伸ばし普通の木と同じ形をしているので、それらがヤナギの仲間と知る人は少ないようです。花芽が綿毛をまとう春先のネコヤナギの木を思い出してもらえれば納得していただけるでしょう。

ヤナギの仲間はどれも水辺が好きで、滝不動付近の高麗川河川敷にこんもりと繁る樹の多くはアカメヤナギです。春の芽吹きの際の葉が赤味を帯びているのでこの名があります。また、開いた葉が他のヤナギに比べて丸みがあるので別名マルバヤナギともいいます。生長の早い木で、近づいてみると太い幹が地面近くで数本に分かれ、どれも巨木のイメージがあります。雌雄異株、つまり雄の木と雌の木があり、綿毛に包まれた柳の種子を柳絮(りゅうじょ)といい、微風に乗って一斉に飛んでゆく様はとても幻想的な光景です。



シダレヤナギ



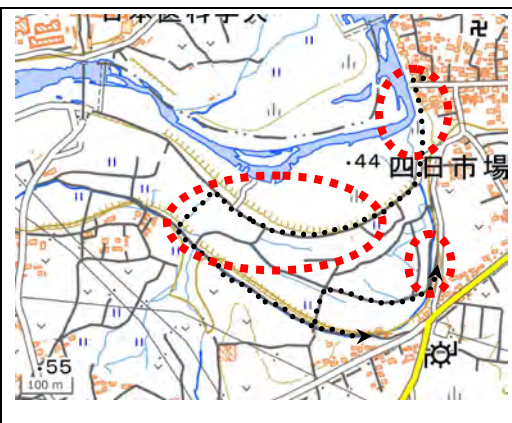
高麗川河川敷のアカメヤナギ

(萩原)

5.1.3 鳥たち

■お勧めのポイント

高麗川には毎年、カルガモの親子がやってきます。中州や川岸の砂利でチドリが卵を抱きます。アシ原ではオオヨシキリが縄張りを宣言し、草地ではキジの親子が散歩しています。滝不動周辺は日本人に親しまれてきた野鳥の大切な繁殖地です。



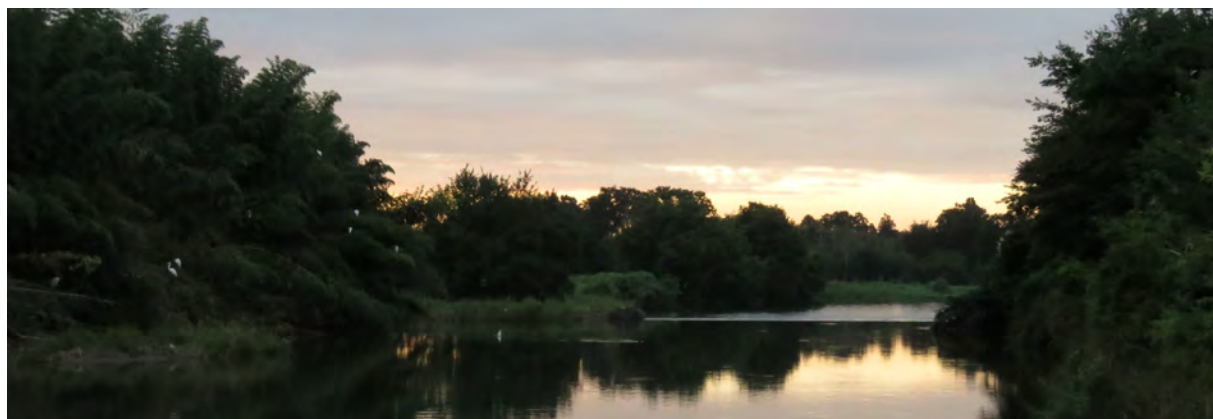
春：ヤナギが芽吹き、桜並木にメジロやヒヨドリが集まります。ツバメが帰ってきました。ホオジロが木のとっぺんで囀る恋の季節がやってきました。草原から「ケーン、ケーン」とキジの声がします。縄張りをめぐって戦いが始まりました。シメ、ツグミは河畔林で群れを作り、間もなく北へ帰ります。

初夏：アシ原にオオヨシキリの「ギョギョシ、ギョギョシ」という声が響きます。近年、日本の湿地では外来種オオブタクサが繁茂し、アシ原は減少。オオヨシキリも減っています。草むらや川岸をキジやカルガモの親子が隠れるように移動していきます。

夏：巣立ったツバメが川や田んぼの上を飛んでいます。セグロセキレイの幼鳥が尾を振りながら、畦で虫を探しています。子育て中の野鳥に必要なトンボ、チョウ、カエル、ヘビが豊富な滝不動は、野鳥にとって大切な場所です。

秋：「キーンキーン」梢にとまったモズの高鳴きが聞こえます。夕方、秋葉神社の対岸の竹藪にダイサギ、コサギ、カワウが集まり、夜を過ごします。ノスリも山から下りてきました。河畔のエノキの実にイカルなどの野鳥が集まってきます。

冬：コガモが渡ってきました。寒くてもカワセミやカイツブリは潜って魚を捕まえます。葉が落ちて、カシラダカ、アオジ、ベニマシコなどの野鳥を観察しやすくなります。滝不動周辺はハヤブサやオオタカなどの猛禽類の狩り場でもあります。半日で30種以上の野鳥を観察できます。

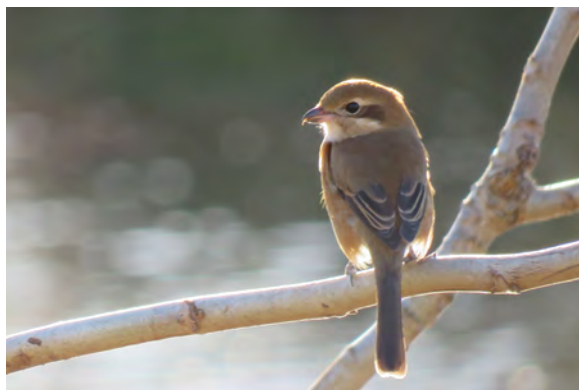


夕暮れの高麗川

① キジ



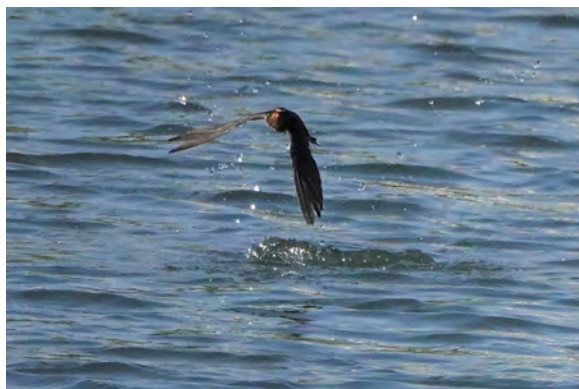
② モズ



③ オオヨシキリ



④ ツバメ



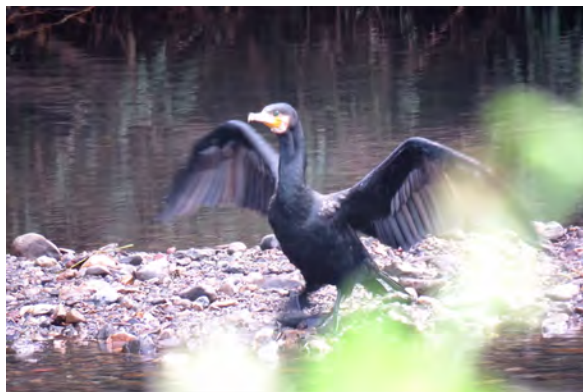
⑤ カルガモ



⑥ ヒヨドリ



⑦ カワウ



⑧ イソシギ



- ① **キジ** 通年 田・草地・河畔林 L58～81cm (カラスより大) 「ケーン、ケーン」
日本の国鳥。民話や童謡に取り上げられるほど、昔から親しまれてきた野鳥です。オスは頭から腹まで光沢のある青～緑色で長い尾が美しいです。眼の周りの赤い皮膚は繁殖期にあざやかなハート型になり目立ちます。メスは全身黄白色で、黒褐色の斑があります。メスは雛を愛情深く育てます。
- ② **モズ** 通年 田・草地・河畔林 L20cm (スズメより大) 「キィーキィー」
「百舌(モズ)」の名の通り、ウグイス、メジロの鳴き真似もとても上手です。秋、滝不動では自分の縄張りを誇示する「モズの高鳴き」があちこちで見られます。オスは過眼線が太く黒いのが特徴で、メスは薄いです。動物食でトカゲやカエルを生け垣などにさす「はやにえ」という習性があります。猛禽類ではありませんが、ネズミや小鳥を捕まえるほどの名ハンターです。
- ③ **オオヨシキリ**(県NT2) 通年 別名「行行子」アシ原・草地 L18cm (スズメより大)
「ギョギョシ、ギョギョシ、ギギギギギ…」 「行行子、行行子…」
夏、アシ原でうるさいほど大きな声でさえずり、自分の縄張りを飛び回ります。「行行子」は俳句の夏の季語になっています。「能なしの眠たし我を行行子」松尾芭蕉。
- ④ **ツバメ** 春夏 川・田・街 L17cm (スズメより大)
「チュピチュチュ チュピチュチュ、チュピー」 「土食って、虫食って、しぶーい」
泥と枯れ草を運んできて家の軒下などに巣を作ります。燕尾服の名前の由来どおり、頭から尾羽まで黒く、両端がとがった尾羽がかっこいいです。トンボやチョウなどの昆虫を飛びながら捕まえます。
- ⑤ **カルガモ** 通年 川・田・草地 L61cm (カラスより大) 「ゲエ、ゲエ…」
坂戸市で一年中見られる大型のカモです。雌雄同色。初夏、滝不動周辺で卵を温めた母ガモが幼鳥を連れて高麗川を泳ぐ姿が見られます。
- ⑥ **ヒヨドリ** 通年 河畔林・桜並木 L28cm 「ピーヨピーヨ」
全身灰褐色、耳羽は茶色です。花の蜜と木の実が大好きで、花の蜜を吸いに桜並木に集まります。食べた木の実の種をあちこちに播いている張本人です。昆虫や小型の爬虫類まで食べる食いしんぼうです。日本周辺にしかいない種です。
- ⑦ **カワウ** 通年 川・河畔林・竹藪 L81cm (カラスより大) 「ゴアッ、ゴアッ」
1970年代、河川改修、水質汚染、狩猟などで数が激減しました。現在は、禁猟になったこともあり、生息数が増え、坂戸市内の川で普通に見られます。群れで川の魚や養魚場の魚を食べます。集団営巣地は糞の臭いがくさく、鳴声大きいなど、住民とのトラブルになっています。高麗川沿いの竹藪をねぐらにしています。
- ⑧ **イソシギ**(県VII) 通年 川・田 L20cm (スズメより大) 「ピッ、ピピピピ…」
滝不動では、一年中見られます。体の下面は白く、白い部分が胸側に入り込んでいるのが特徴です。飛んだときに翼の白い帯が目立ちます。川原などで採食するときは、尾羽を振りながら歩きます。シギやチドリの仲間は、川原が草で覆われて、砂利が減少していることも影響して、生息数が減っています。 (富田)

5.1.4 水の中の生きもの

■ お勧めのポイント

滝不動周辺の水田地帯及び高麗川のほとりは、湧水と高麗川の流れのおかげで、とても身近に水の中の生きものに出会うことができます。段丘崖沿いに流れるせせらぎ、これが流れ込む高麗川の三号堰が作る広い水面がポイントです。子供たちはせせらぎで魚観察、大人は高麗川の大形ブロックの上に陣取って、魚釣りはいかがですか。



① オイカワ



② カワムツ



③ 魚たちの棲み処



④ ドジョウ



⑤ スジエビ



⑥ カワニナ



高麗川大型ブロックでの釣り

滝不動付近は高麗川が大きく湾曲し、高麗川の中でも最も広い川幅を見せています。そして、三号堰のおかげで、広い水面を輝かせています。大型ブロックの隙間はスジエビの巣になっており、魚も豊富で、漁業組合では、アユ、ヤマメ、ウグイ、ナマズ、カジカ、ギンブナ（平成30年実績）を放流しています。釣り人に聞くとここではオイカワとカワムツ2種が多く釣れるようです。なお、漁業組合が産卵場の整備や密漁の監視をしています。漁具の使い方も規制しており、釣りはいつでもできますが、投網などは8月中旬以降でないと使えません。魚との共生を図っています。

① オイカワ

オイカワはヤマベとも呼ばれ、婚姻色が綺麗で人気がある魚です。一般には5～10cmサイズで、きれいな砂利の河床に産卵するので、泥が多くなった今、減少しています。在来種ですが、琵琶湖からの国内移殖魚もいるそうです。

② カワムツ

カワムツは最近急増している国内外来種です。高麗川本流はもちろん、滝不動のせせらぎの一部にたくさん見られます。一般に捕れるサイズは5～15cmで、青黒い縦帯、胸びれの根元が黄色いのが特徴です。水生昆虫の他、落下昆虫も食べるのでジャンプする姿が見られます。東京オリンピックの建設ラッシュによる砂利取りで川が変わったそうです。護岸工事も魚や鳥たちにとって大事な入り江をなくしてしまいます。ただ、高麗川のカワムツにとっては苦にならないようです。

子供たちと魚観察

③ 魚たちの棲み処

2号堰から流れる水路と多和目からの水路が交わるあたりは魚が豊富です。さらにその上流の崖沿いの水田の小川、また滝不動の前の水路トンネルは生きものの大事な棲み処になっており、観察することができます。上記のカワムツが多く、まれにオイカワ、ムサシノジュズカケハゼも見られます。その他、カワニナ愛好会で観察することができた水の中の生ものは以下のとおりです。

④ ドジョウ（国NT）

おなじみの魚ですが、泥が好きで高麗川本流では見られず、水田ならではの種です。田んぼの整備により減少しているそうです。よく採れるのは5～10cmサイズです。

⑤ スジエビ

シナヌマエビとこのスジエビが見られます。筋があること、またテナガエビの仲間なので、手足が長いのが特徴です。川エビとして居酒屋にでるのはこれとテナガエビです。

⑥ カワニナ

春と秋に、卵ではなく稚貝で生まれます。四日市場のカワニナ愛好会が、毎年春の水路整備の後に稚貝をゲンジボタルが棲みやすい場所に移動させています。細長い巻貝で、殻頂部がとれているのがほとんどです。ホタルが出るのはこの貝がいるからですね。

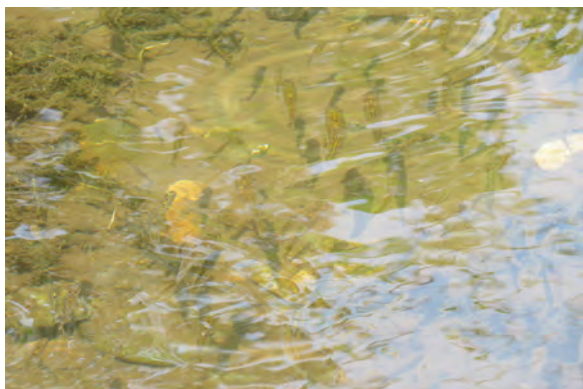
⑦ ヤゴ



⑧ サワガニ



⑨ 魚の群れ



⑩ 春先には稚魚たち



⑪ ミナミメダカ



⑫ 生きものの気配がない田んぼ



コラム 四日市場カワニナ愛好会

漁業組合と地元の方が子供たちと活動されています。湧水が集まるせせらぎを清掃し、カワニナが高麗川に落ちていかない様に保護すること、そして水の中の生きものの観察を通して、自然を大事にする意識の醸成を図っています。5～6年生ともなると自然が大好きになり、大人顔負けの虫博士、魚博士になる子供が現れます。



⑦ ヤゴ

滝不動で最も目立つ虫はトンボで、その幼虫がヤゴです。崖下の水路に溜まった落ち葉と泥を持ち上げてみると居ました。サナエトンボの仲間のヤゴのようです。見かけによらず肉食性で強力なアゴを伸ばして獲物をつかまえます。成虫は体長 40mm 内外、黒地に緑黄色の斑紋があり、しっぽの細いトンボです。晩春～初夏の早苗取りのころに発生するのでこう呼ばれています。一緒に写っているのはカワゲラとヌマエビです。

⑧ サワガニ (県NT2)

サワガニがいるということは水がきれいな証です。日中は石の陰に隠れていますが、雨の日には昼間でも活動するようです。なんでも食べます。捕まえて水槽に入れたら、目の前で一緒に入れたカワゲラを食べました。昔は湧水や台地や丘陵の細流であればどこにでもいましたが、今では残念なことに絶滅危惧種になっています。大事にしましょう。

⑨ 魚の群れ

多和目からの水路と二号堰からの水路がぶつかるあたりは、本流から入ってきた魚たちがいます。凄いいスピードで泳ぎまくり、群れを成しています。カワムツが多いようです。水草の中を泳ぐさまはいつ見ても気持ちが良い見とれます。こちらの姿を見ると群れがサッと移動します。

⑩ 春先には稚魚たち

多和目からの水路と二号堰からの水を分岐して、高麗川へ直接放流しています。放流口には、水が綺麗なため、春先には稚魚たちが集まっています。波紋を作りながら泳ぐ姿はやはりみとれます。以前は、滝不動の水田をつなぐ水路にはたくさんの稚魚が見えましたが、残念ながら最近見かけるのはここぐらいです。最近の高麗川の護岸工事で支流に入り込むことができなくなっているのが原因かもしれません。

⑪ ミナミメダカ (国VU、県NT2)

春先、田植えの準備ができた頃から水田の水を切るまでの時期はメダカの季節です。城西大学のグラウンドの駐車場付近にある水田の用水路に注目です。銀色の目玉と黒い背中の中縦筋がある小さな魚、メダカを見つけました。数匹でスイスイと泳ぐのが特徴です。

⑫ 生きものの気配がない田んぼ

昭和 40 年代に農薬がたくさん使われ、カラスガイがいなくなり、タナゴも減ったそうです。そしてタニシがいなくなりました。農薬の改良も進んだと思いますが、湧水が直接流れ込まない水田や用水路には、稚魚の姿も水中昆虫の姿も見えません。水田の泥底にはこれらが動いた痕跡もありません。青々とした稲と対象に茶色くなった雑草が除草剤の利用を示しています。水田の保全では、高齢化と担い手不足が大きな問題です。

コラム メダカの学校

メダカは、卵から孵化するには、水温 20 度以上が絶対条件で、孵化まで 9～11 日。川魚では 1～3 日程度が多いので、時間が掛かる魚です。この間安全な場所が必要です。このような条件を満たすのは、湿地や水田です。水田を耕して川から水を引くときに水田に移動して、他の魚が生まれてくる前の 4 月に、水温が上がりやすい条件を利用して産んで孵化します。この時期、オス同士が喧嘩をして波紋ができるので、そんな時には水田をのぞいてみましょう。

メダカは、水田・水路にいたので、昔はとても身近な魚でした。食べ物は微生物（プランクトン）、ミジンコ、ケイソウなどです。水質もあまり気にしません。観賞魚にもしやすいです。ホームセンターには、色々な色のメダカが売られています。

ところで、今大問題が起こっています。飼っていたメダカを川に放すことで、本来、その地域にしかない在来のメダカの DNA が守られず在来種絶滅の危機にあります。また、生息環境の喪失や外来種の侵入で今や貴重種になってしまいました。

買ったメダカはずっと家においてください。

高麗川でもメダカが捕れます。特に大水が出た後に多いように感じます。水田や水路から流されてきたのかと思います。

■ 参 考

この記事は、環境学館いずみでこれまで行ってきた観察会・講座の成果に基づいています。

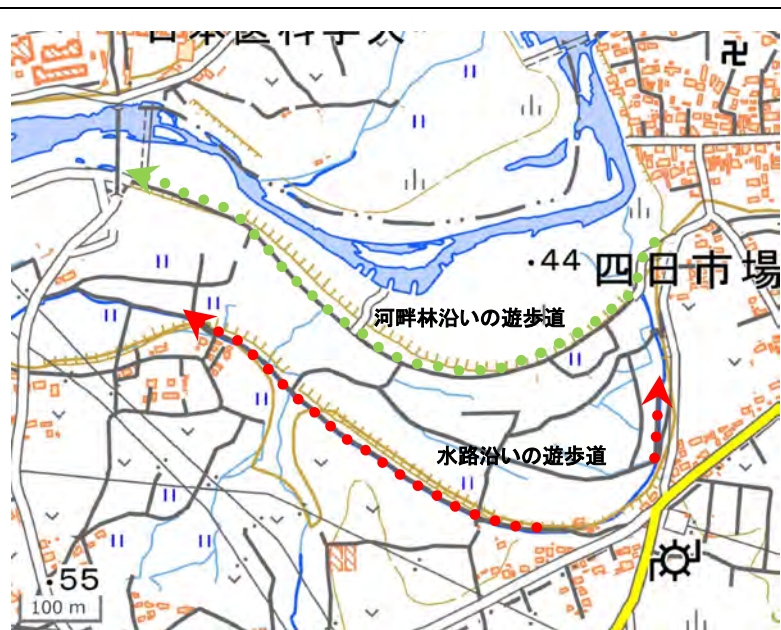
時 期	観察会・講座の名称	講 師
平成 26 年 6 月 15 日	「滝不動湧水群周辺の自然を見つめる」フォーラム	鳩山野鳥の会 富田恵理子
平成 27 年 1 月 25 日	日本の川を知り、高麗川を知る	京華中学・高等学校教師 渡辺昌和
平成 28 年 8 月 21 日	メダカのがっこう～知られていないメダカの不思議	同上

(稲垣)

5.1.5 虫たち

■ お勧めのポイント

まず注目したいのは、滝不動湧水群から流れる湧水を主体とし、崖に沿って流れる水路です。夏はオニヤンマがその雄姿を見せてくれます。また、水田を挟んで高麗川の河畔林が連続しており、虫たちにとっては恵まれた環境といえます。ただ、最近除草剤の散布などにより、年々棲みづらくなっている現状があります。



■ 春の滝不動

春、滝不動で目立つのはスジグロシロチョウ、ツマキチョウなどのシロチョウ科の仲間です。また、崖に沿った水路では、アオハダトンボやカワトンボが観察できます。まれにミヤマカワトンボも見ることができます。そのほか、オジロサナエやホンサナエなど、サナエトンボの仲間も水路近くを飛んでいます。

■ 夏の滝不動

オニヤンマは城山から環境学館いずみまで、高麗川では広範囲に分布していますが、滝不動周辺が一番観察しやすいのではないのでしょうか？生息する水路の脇が遊歩道になっているため近づくのも容易で、産卵や羽化のシーンに立ち会ったこともあります。

ハラビロトンボは城山や浅羽ビオトープでも見られますが、滝不動周辺がもっとも個体数が多く、特に水田とその周辺の休耕田が観察ポイントとなっています。

チョウではコムラサキやゴマダラチョウが見られ、運が良ければ高麗川河畔林側の草地で、ウラギンヒョウモンに会えるかもしれません。

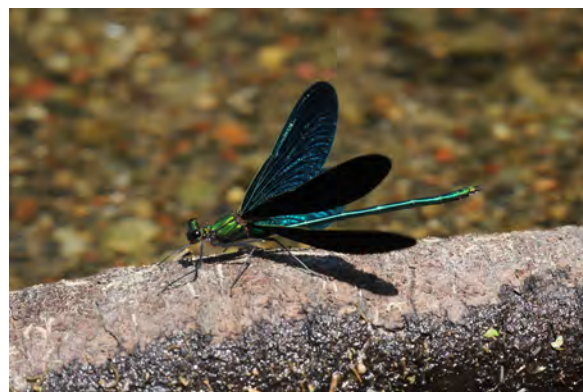
■ 秋の滝不動

秋になると、虫の数も種類もだいぶ減ってきます。その中で目立つのが赤とんぼの仲間です。滝不動周辺ではナツアカネ、アキアカネなどいろいろな赤とんぼ見られますが、特にミヤマアカネが多いようです。名前はミヤマですが、深い山でなければ見られないわけではなく、平地でも普通に見られます。

① ツマキチョウ (オス)



② アオハダトンボ (オス)



③ カワトンボ橙色型 (オス)



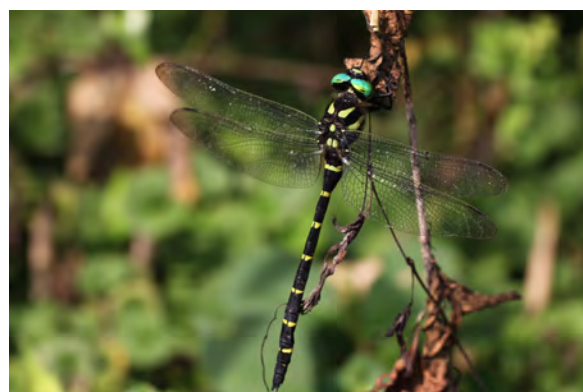
④ カワトンボ透明型 (メス)



⑤ ゴイシジミ



⑥ オニヤンマ



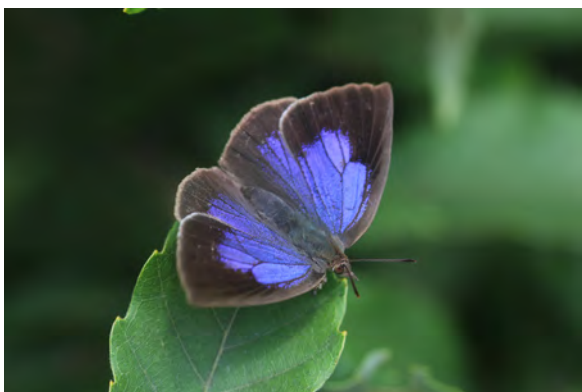
⑦ ハラビロトンボ (オス)



⑧ ミヤマアカネ (オス)



⑨ ムラサキシジミ (メス)



⑩ ウラナミシジミ (オス)



① ツマキチョウ

モンシロチョウやモンキチョウなどと同じシロチョウ科の仲間です。他の仲間は春から秋まで観察できるのですが、ツマキチョウは春しか姿を見せません。春に羽化した成虫は、すぐに卵を産み、孵化した幼虫は成長し蛹になりますが、そのまま夏・秋・冬と蛹のまま過ごし、翌年の春に成虫になるからです。

② アオハダトンボ (国NT、県VU)

高麗川では、夏になるとアオハダトンボによく似たハグロトンボがたくさん発生します。アオハダトンボはそれに先立ち、5月くらいに発生します。全身が金緑色に輝き、特にオスは翅まで輝きます。

③ ④カワトンボ

写真は2枚ともカワトンボです。カワトンボは同じ種でも、個体によって翅の色が違うのが特徴です。

⑤ ゴイシシジミ (県NT2)

写真で見る通り、小型のかわいらしいシジミチョウですが、幼虫は肉食です。ほとんどのチョウは幼虫が植物の葉や花を食べますが、ゴイシシジミはササの葉につくアブラムシを食べます。ただし、いくらササがあってもアブラムシが発生していなければゴイシシジミもないわけで、毎年発生する場所が変わります。

⑥ オニヤンマ

日本最大のトンボです。滝不動の水路上を悠然と飛ぶのを見ることができます。複眼は金緑色に輝いていますが、羽化したばかりの個体は薄茶色をしています。

⑦ ハラビロトンボ (県NT2)

このトンボも滝不動だけでなく他の場所でも観察できますが、滝不動以外では個体数が少ないようで確実に観察するには滝不動が適しています。

⑧ ミヤマアカネ

秋の主役アカトンボの仲間です。滝不動ではマユタテアカネやアキアカネなど他にも観察できますが、一番存在感のあるのはミヤマアカネだと思います。

⑨ ムラサキシジミ

夏にも羽化しますが、秋の方が個体数は多いようです。成虫で冬を越します。

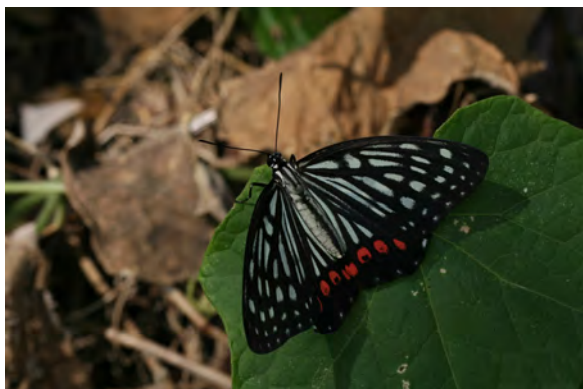
⑩ ウラナミシジミ

坂戸では春～夏は見ることはできません。秋になるといつの間にか現れます。これは南の地方で発生したものが、発生を繰り返しながら北上してくるからです。

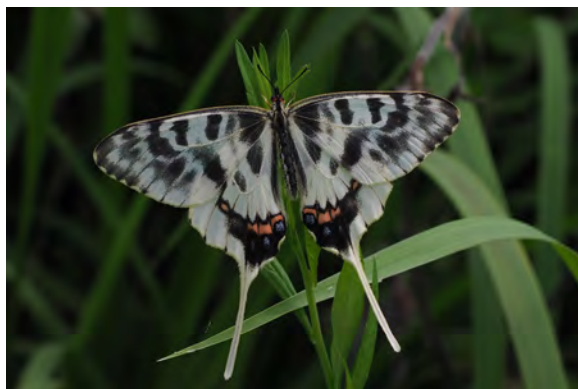
そして、翌年また南から北上して分布を広げ、冬に死滅するというのを毎年繰り返しているのです。滝不動周辺では、他の場所より観察する機会が多いようです。

コラム 外来種の話

最近になって、昔はいなかったチョウがいつの間にか目につくようになり、違和感を覚える人もいます。実はこれらのチョウは、人為的に海外から国内に持ち運ばれたものです。坂戸周辺ではアカボシゴマダラとホソオチョウが定着しつつあります。



アカボシゴマダラ



ホソオチョウ (オス)

問題なのは、両種とも在来種と食草（食樹）が同じであることです。そのため競合により、在来種の生存が脅かされる恐れがあります。

分布を拡大しているチョウ

外来種ではありませんが、同じように昔はいなかったチョウがいつの間にか目につくようになり、違和感を覚える人もいます。これらのチョウは、以前は坂戸より南の温かい地方に分布していたものが、だんだん北へ分布を拡大してきたものです。坂戸周辺では、ツマグロヒョウモンとムラサキツバメが定着しつつあります。

もしかしたら地球温暖化の影響かもしれません。



ツマグロヒョウモン (メス)



ムラサキツバメ (メス)

(河合)

5.2 浅羽ビオトープ

■ 行き方

所在地：坂戸市大字浅羽

電車：東武東上線「坂戸駅」から徒歩 20 分

車：県道 74 号日高川島線の「浅羽ビオトープ」
道路標識が目印です。

駐車場あり。

トイレ：駐車場に公衆トイレあり。

■ 案内図



■ 魅力

浅羽ビオトープは、農業用水路・雨水排水路である鶴舞川（伝川）が高麗川に流れ込む場所に位置し、河畔林が発達しているのが特徴です。水辺と林の連続は動物たちにとって暮らしやすい環境です。周囲に水田が広がり、鳥が餌を採るための好条件がそろっています。

平成 16 年には「関東の富士見 100 景」にも選ばれ、バードウォッチングのメッカとなり、遠くからもカメラマンがたくさん押し寄せするスポットになりました。

専用駐車場から高麗川の堤防に上がり、少し下流（関越自動車道側）に向かうと、河川敷に橋が見えます。橋を渡って観察園路に入ります。園内の素掘水路沿いは、最も鳥を観察しやすい場所です。鳥はもちろん、イタチにあえるかもしれません。河畔林の中や高麗川の川岸、堤防の上からの河畔林の梢や中里堰も見逃せない観察ポイントです。林でドングリ拾いも楽しいです。ウラゴマダラシジミは小さい蝶ですが、ここの代表的な貴重種です。カブトムシなどの虫とりも楽しめます



浅羽ビオトープの案内板

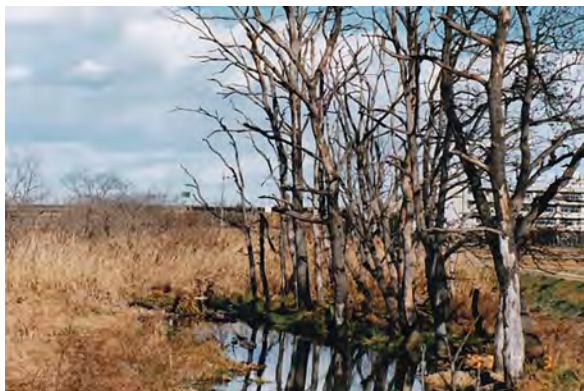
コラム 浅羽ビオトープとは

国道交通省荒川河川上流事務所、坂戸市役所、坂戸市民による「高麗川ふるさとの川整備事業～市民参加による川づくり～」が進められ、「こまがわ市民会議」の成果として高麗川整備構想図が平成12年に作られました。森戸地区は「豊かな自然を保全・育成するゾーン」、浅羽地区は「自然とふれあい、学習するゾーン」、栗生田地区は「水と親しみ・水辺を利用するゾーン」と決められました。

浅羽ビオトープは、平成15年に完成し、その時に設立された「高麗川ふるさとの会」によって管理され、今のような散策しやすく、動植物にとっても集いやすい環境になりました。

最も大きな工事は、右岸堤防の近くを通過して今の水辺広場に湿地を作っていた水路を全体に本流側に変えて今の水路にしたことと、園路の整備でした。

高麗川ふるさとの会は、植物や野鳥の観察会も定期的に行っていますが、水路の上流から流れてくるゴミをネットで貯めて捕捉したり、園路及び水路斜面などの草刈り、河床の泥さらいや、ゴミ拾いなどの管理作業を行っています。もっとも懸案だった水路の水質も改善されました。草刈りも、動植物への配慮を行うために、ふるさとの会で行うようになったそうです。植物などの観察会を毎月催されているので、参加すると新しい発見が待っています。



整備前の河川敷の状況 (写真提供 坂口稔)



整備後の野鳥観察会



整備後の植物観察会

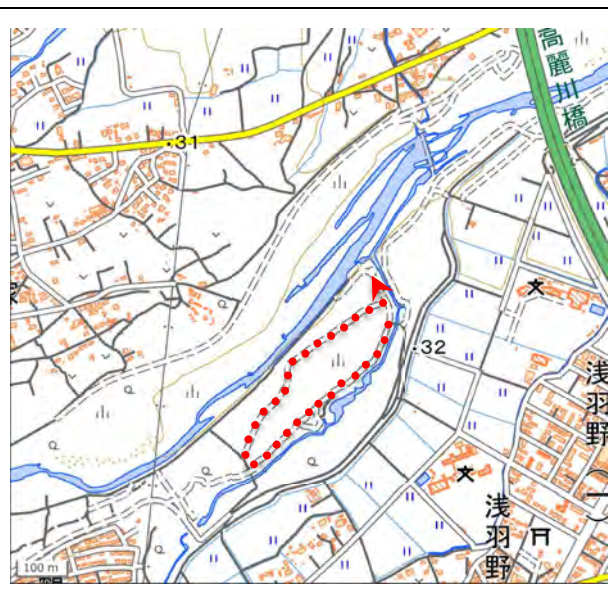
(稲垣)

5.2.1 植物

■お勧めのポイント

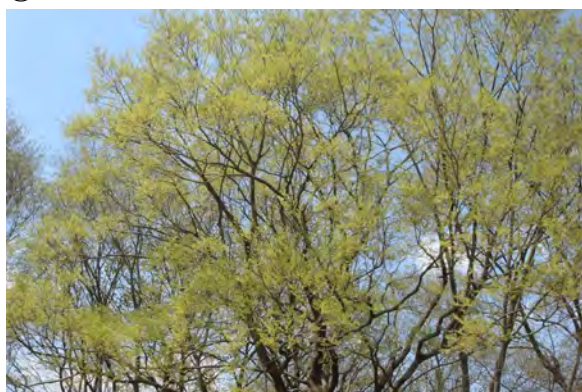
隣接する下流側には、江戸期に川越藩の御蔵米の生産地（川島町）を水害から守るために造られたと言われる「霞堤」の一部が残り、当時の土地環境が偲ばれます。土砂の堆積で生まれた陸地部は、明治期に開墾され桑畑として利用されました。「浅羽ビオトープ」は、この桑栽培放棄地が造成された所です。

老若男女-誰もが、河川域の生きものに触れ合える貴重な水辺空間となっています。



■景観と河畔の木々■

①エノキ



②オオシマザクラ・ヤマザクラ



③クヌギ



- ①青空を黄色に染めて、開花するエノキ林。エノキは当地で最も株数の多い高木です。枝先が扇形に広がり、葉が茂ると丸い樹冠になります。
- ②風媒花の地味な花の多い当地に、華やかさを添える2種の桜。民有地の植栽。下層には、最も早く3月に開葉するイボタノキの緑色。
- ③育成されるクヌギ林の冬の光景。若い木ほど葉を落とさない光景は話題になります。

■浅羽ビオトープ“だから・こそ”の木々と草花■

① オニグルミ



② アケビ



③ ネムノキ



④ ヒメコウゾ



⑤ イヌザクラ



⑥ マユミ



⑦ イボタノキ



⑧ キササゲ



①オニグルミ クルミ科

株によって雌花と雄花の咲順が違う面白い性質がある。

②アケビ アケビ科

8個前後のめしべが全部実ってできた、タコ足果。

③ネムノキ マメ科

赤い刷毛はおしべ。開花は夕方。蛾を誘う秘策あり。

④ヒメコウゾ クワ科

赤ひげは雌花群の1個ずつのめしべ。左の団子状雄花群。

⑤イヌザクラ バラ科

ブラシの様に咲く桜。ウワミズザクラに対して“イヌ”。

⑥マユミ ニシキギ科

鳥を誘う森のシャンデリア。赤いのは種子ではなく仮種皮という組織。

⑦イボタノキ モクセイ科

ロウムシ分泌の蟻で“イボ取り木”が名の由来。ウラゴマダラシジミの食草。

⑧キササゲ ノウゼンカズラ科

“ささげ”状の細長い果実が垂れ下る。

コラム 残念な景観

◆「ビオトープ」というネーミングには、生物環境保全への企図がこめられています。しかし、当初遺存していた遊水地環境の希少種は消失し、畑の強害雑草や帰化植物が蔓延する現況です。雑草や帰化植物が悪いものではありません。人間による水域の改変・造成や舗装による土壌の変質と乾燥化に対する自然界の答えに他なりません。

◇民有地のエノキ・クヌギ・ムクノキなどの二次林の衰退と代わるイボタノキ・ヌルデ・ノイバラ・メダケ・ツルヨシなどの地表部被覆は、高木種の実生更新（みしょうこうしん）を妨げ、帰化植物の侵入・繁茂を助長しています。この「荒れた景観」は、人間の管理放棄の結果です。

◇一方、遊歩道が整備され、植樹と育成と草刈りで管理された造成水路側の整った景観に、人は和み、癒され、「美しい自然」を感じるのかも知れません。しかし、この美観は又、多くの湿性植物の消失・衰退を招いた管理の結果なのです。◆“荒れた”や“美しい”は、自然の本性ではなく、人間の価値観です。好対照をなす2つの景観も、人の価値観からだけでなく、そこに暮らす植物の形と意味を知っていると、どちらも紛れもなく“生きもの空間-ビオトープ”だと。

⑨ スイカズラ



⑩ フユノハナワラビ



⑪ ニガカシュウ



⑫ ミクリ



⑬ カワラサイコ



⑭ サクラタデ



⑮ ミゾコウジュ



⑯ ガガイモ



⑰ コモチマンネングサ



⑱ カテンソウ



⑨ スイカズラ スイカズラ科

甘い蜜は子供も昆虫も大好き。

⑩ フユノハナワラビ ハナヤスリ科

羽状葉と孢子囊穂（ほうし・・・）で一枚の葉。太古からの化石的シダ。

⑪ ニガカシュウ ヤマノイモ科

雄株・雌株が遠距離にいるので種子は稀。当地のは珍しく雌株。

⑫ ミクリ ミクリ科（国NT、県NT）

茎の下方の雌花の実が“いが栗”。

⑬ カワラサイコ バラ科（県NT）

キジムシロの仲間。河原環境の激減で埼玉県の準絶滅危惧種。

⑭ サクラタデ タデ科

当地は同じタイプの花のみで種子はできない。（異型花柱性）

⑮ ミゾコウジュ シソ科（国NT、県NT）

準絶滅危惧種。サルビアの仲間でおしべがおもしろい。

⑯ ガガイモ ガガイモ科

めしべ・おしべが一体化した超不思議な花は、実も面白い。

⑰ コモチマンネングサ ベンケイソウ科

種子を作らず、むかごで増える。近年各地で激減している。

⑱ カテンソウ イラクサ科

好天でおしべは立ち上がり、反り返って霧のように花粉散布

コラム 残念な景観の残念な植物

- ◆「ウラゴマダラシジミ」を育てているのは「残念な景観」の主犯イボタノキ林です。若葉は幼虫の食草、花は成虫の蜜源です。人にとっても、イボタロウカイガラムシの分泌する蠟は、かつて、いぼ取り・止血・塗料に役立つ生活資源でした。ヌルデにアブラムシが形成する虫こぶ「ヌルデミミフシ」は、今も貴重な古代からの伝統的染料「五倍子（ふし）」の原料です。薬剤ともなります。
- ◆“ビンボウカズラ”と呼ばれる畑の強害雑草「ヤブガラシ」は、家の衰亡の代名詞残念な草の代表格ですが、ドイツでは植栽され、フェンスを美しく飾るそうです。都内では、クスノキ科が育てるアオスジアゲハの蜜源として最近注目を集めています。花のデザイン・多量の蜜とそのコスト配分に加え、葉と対生する茎巻きひげが2回出るとは1回休む態勢の謎は今だ論議的的のです。種子を作る株と、不稔性（ふねんせい）の3倍体の2種類がありますが、都市では消えた種子株が、当地や市内にはまだ残っています。
- ◆「残念な植物」も、一木一草手にとり観察すると、そこらのただの植物の、只者ではない形や生き方が見えてきます。「不思議！・面白い！・凄いで植物！」なのです。葉で、花で、土の下で、他の生きもの達の命と繋がっている事が見えてきます。“ふれあい・楽しみ・学ぶゾーン”－浅羽“ビオトープ”を、いきもの目線から再考したいものです。名付けた組織も、管理する団体も、訪れる人々、私達も。

(福島)

コラム 自然観察会参加者の声

環境学館いずみの市民環境講座の始まりは、2010年5月「さかど台地 水の恵み塾」でした。

準備期間中には、自然をテーマにした講座に人が集まるだろうかと心配する声も聞かれたようですが、ふたを開けてみると大盛況で、第一回の講座には39名という多くの方が参加されました。以来、2020年3月までの10年間で講座は90回開催され、延べ人数で1852名の参加者がありました。

各回の講座で実施されたアンケートには様々な声が寄せられています。10年分のアンケートの中からごく一部ですが、参加者の声をご紹介します。

- ・坂戸に来て8年目、こんなにも自然があるとは思いませんでした。
 - ・初めて目にする場所ばかりで興味深く、今後も参加したいと思いました。
 - ・(真夏の河川敷で昆虫採集をして)暑い中その暑さも忘れ童子にかえり、楽しい時間でした。
 - ・蝶の仲間が多いこと、蝶の幼虫の食べ物に違いがあることにもびっくり。
 - ・何気ない花が愛おしく見えました。
 - ・見たこともない魚がたくさんいて、網の使い方とれ方が違うこと、種類もいろいろあることなど教えていただき興味深かった。
 - ・天気も晴れて気持ちがよく楽しかったです。樹木がたくさんあるのに驚きました。
 - ・ビオトープは来るたびに新しい発見があり思いもかけない事柄の知識を教わる。
 - ・野鳥のことが少しわかり、もっともっと知りたくなりました。
 - ・孫が来たとき資料を見せながら説明してあげようと思った。
 - ・湧水、清水が坂戸周辺にも沢山あるのに驚きました。
 - ・初めてコハクチョウを見ることができて良かったです。寒かったけど楽しかったです。
 - ・(城山に)植物から菌類まで貴重な植物がこんなにあるとは知らず、大変勉強になりました。ほかの方にも伝えたいです。
 - ・立ち止まって眺めていると、様々な鳥が飛び、身近な所で鳥を見ることができ、自然が守られているのは素晴らしいと思いました。
 - ・環境の大切さを考えさせられた。新しい見方をすべきことを思わされた。
 - ・いつも知らないことを一つでもわかって、教えてもらい楽しいです。
- まだまだ紹介しきれないたくさんの声がアンケートに寄せられました。

参加者の皆さんが講座で見つけた新しい発見や新しい知識、そしてなにより自然を楽しむ気持ちをたくさん書いていただきました。

是非ご一緒に坂戸の自然を楽しみましょう！！

(松田)

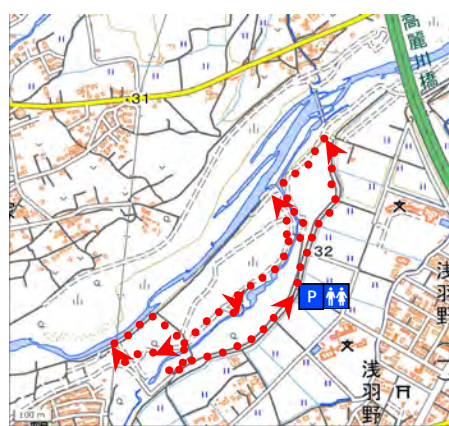


5.2.2 鳥たち

■ お勧めのポイント

ビオトープの整備で鳥たちの格好の居場所になり、飛来する渡り鳥も多くなりました。

ここの渡り鳥は2対3で夏鳥より冬鳥の方が多ようです。また河畔林から背後に広がる田園緑地、適度な草が繁る水路がある環境は、里山の森林に住んでいる鳥たちが途中下車するのも都合よくされており、100種以上の野鳥を観察できます。



① ヒレンジャク



② カワセミ



③ シメ



④ ベニマシコ



⑤ イカル



⑥ イカルチドリ



① ヒレンジャク（緋連雀） 冬春 L=17 cm

冬鳥として渡来し、北日本や本州中部の山地に生息していて3月～4月ごろ太平洋岸の各地に出現し、イボタ・ヤツデ・キヅタ・ヤドリギなどの実を食べるようです。浅羽ビオトープでは、クヌギの新芽やヤブラン・リュウノヒゲの実を食べています。

時には100羽を超える群れを作ることもあります。

② カワセミ（翡翠）（県RT） 通年 L=17 cm

漢字で翡翠と書かれるカワセミは、コバルト色の背と腹側の橙色の組み合わせが美しいことから「飛ぶ宝石」とも呼ばれる美しい鳥です。

浅羽ビオトープでは繁殖期の4月～6月頃以外は年間を通じ見ることができます。英名は kingfisher と呼ばれている名の通り、停空飛翔（ホバリング）して水中にダイビングし魚を捕らえる姿をよく見ることができます。

③ シメ（鶺鴒） 冬春 L=18 cm

浅羽ビオトープには冬鳥として11月頃来て3月くらいまでおり、2～3月になるとあちこちに集まって群れをなした姿が多く見られます。木の間くらいの高さに見られることが多く、春に北へ渡っていく頃は下に降りてくることも多いようです。

くちばしが強く硬いものでもつつきますが、そういうごつい見かけの割にかわいい鳴き声で鳴きます。

④ ベニマシコ（紅猿子） 冬春 L=15 cm

顔が猿に似ているので漢字では紅猿子と書きます。冬鳥で浅羽ビオトープでは多い時間で5～6羽見られ、色が鮮やかなので写真を撮りに多くの人が訪れます。水路側によく居ます。

メスはオスよりも多少地味な色ですが、優雅さがあります。

⑤ イカル（鶺鴒・または斑鳩） 秋冬春 L=23 cm

留鳥で100羽以上の群れをなして土手やビオトープ内を移動します。シメによく似ています。

5～7月は営巣のため、浅羽ビオトープには少なくなります。

⑥ イカルチドリ（桑鳩千鳥）（県NT1） 通年 L=20 cm

高麗川の砂礫の川原や中州に棲息しています。

ピオピオと鳴きながら飛び回っています。

6月～7月頃5cmにも満たない小さな雛が川原を駆け回り、親鳥が心配そうについて歩く姿は見飽きない光景です。

ただ高麗川にはこうした砂礫の川原が年々少なくなっているようです。

⑦ エナガ



⑧ カイツブリ



(全画 坂口稔 作・提供)

コラム 市の鳥について

浅羽ビオトープの美しい鳥たちの絵と説明を提供して下さった「高麗川ふるさとの会」の坂口稔さんは、以前ある方から市の鳥について意見を求められました。坂戸市では、市の木はサクラ、市の花はサツキと指定されていますが、市の鳥の指定はまだありません。高麗川を代表する鳥としてカワセミがあげられますが、カワセミは既に日高市などで指定されています。

坂口さんは高麗川の周辺に棲息する鳥の中から、

「留鳥であること」

(ヒレンジャク、キレンジャクは浅羽ビオトープを有名にした鳥たちですが、冬鳥や夏鳥のように特定の季節しかいないのは市の鳥には相応しくありません。)

「近隣の市町村で指定されていないこと」

(言うまでもなく坂戸市の鳥ですから、近隣との重複は避けたいですね。)

を条件に次の3種を推薦されています。

- ・イカルチドリ

高麗川の川原で営巣していますが、名前が少し長すぎるでしょうか？

- ・カイツブリ

背中に雛鳥を載せた姿は愛らしく、市のマスコットにふさわしいのでは？

- ・エナガ

姿、鳴き声が愛らしく、カイツブリ同様に市のマスコットにふさわしいのでは？

いつの間にか立ち消えになった市の鳥の話が再燃し野鳥に対する関心が高まれば、自然環境への関心につながると考えています。いずれ坂戸市民の意思で市の鳥を決めることができれば素晴らしいと思います。

⑦ エナガ（柄長） 通年 L=13 cm

背にワインレッドの羽を持った尾の長い小さくてかわいい鳥です。

木の二又になっている部分にコケなどで木肌そっくりの巣を作ります。

それでも天敵に襲われるのか途中で放棄した巣を見かけます。

浅羽ビオトープでは営巣して雛をかえしているようです。

7月～8月頃から、チーチーチー、チャッチャツ、ツリリリなどと鳴く子連れの10羽～20羽程の群れが見られます。

⑧ カイツブリ（鴉（にお） 鶺鴒（へきてい） 鶺鴒（へきてい）） 通年 L=26 cm

高麗川のいたるところに棲息しています。

足指にひれ状の弁膜がついており、水をかいてたくみに潜水します。20秒余りも潜ることができるようです。

6月～7月頃には背中に雛を乗せた親鳥をよく見かけます。

カイツブリは古くは鴉（にお）と呼ばれ万葉集では枕詞として登場しています。

俳句では夏の季語として「浮巢」あるいは「鴉の浮巢」として不安定な物や状況の象徴として多く詠まれています。

また琵琶湖には古くから多く棲息していて「鴉の海（鴉の湖）」と呼ばれていたようです。現在もカイツブリは滋賀県の鳥として親しまれています。

コラム 野鳥観察のマナー

浅羽ビオトープには遊歩道と共に観察のための通路が整備されています。むやみに河畔林の中へ踏み込むことは、鳥たちの棲み処を荒らすこととなります。

巣に近づくと鳥は営巣を放棄しますし、例えばヒレンジャクはヤブランの実を食べますが気付かずにヤブランを踏み荒らすとヒレンジャクは来なくなります。中には写真撮影のために雑木林を伐採したり、餌付けをしたりする人が時々見受けられ、生育環境の急激な変化が懸念されます。そういうカメラマンは野鳥が好きというよりも写真を撮るのが好きで、野鳥のことを考えていないのでしょう。野鳥の写真を撮るならば、まず野鳥を好きになって、野鳥に害を与えないように撮影を行って欲しいものです。

浅羽ビオトープの環境が野鳥にとって格好な場所になっているのでその数も増え、県内はもちろん、千葉、東京、神奈川などからたくさんの方が訪れるようになりました。高麗川ふるさとの方々をはじめ多くの方がこの環境を守ろうとしています。

浅羽ビオトープに限らず、年々棲み処が減少している野鳥たちが安心して生活できる場所を私たちが守っていききたいものです。

コラム 鳥から知る環境のものさし

(財)日本鳥類保護連盟（現在は公益財団法人）による環境のものさしの定義があります。

単純に言うと珍しい野鳥がたくさん居るほど良い環境とみなし高得点、身近に居る鳥ほど点数が低くなります。

ものさしを使って浅羽ビオトープの環境を評価してみました。

観察できた鳥の合計点は

2004年4月～7月 82点

2011年4月～7月 106点

環境レベルは得点によりA～Eの5段階に区分され、上記点数はBで、丘陵、谷津、里山に該当します。浅羽ビオトープはそんな地域ではありませんが、ワンド、河畔林があり、住宅地から離れているため、同じような環境を作っていると思われます。

詳しくは「鳥から知る環境ものさし」をインターネットで検索してください。

高麗川ふるさとの会 第四分科会「野鳥」は毎月1回、浅羽ビオトープで野鳥の観察会を行っています。

2003年7月～2018年12月まで計186回間に観察された種類と頻度は別表通りです。

渡り鳥、留鳥、浅羽ビオトープに営巣していなくても途中下車する留鳥など、合わせるといかに多くの野鳥が観察できたかがわかります。また観察会以外の日にこの表以外の鳥も見られたそうです。

坂戸市は関東平野の端に位置し、山があり（市内唯一の城山）、豊かな河畔林を持った川があり（高麗川、越辺川）、もちろん広い台地があり（坂戸台地）、首都圏でありながらも豊かな自然に恵まれていることをあらためて実感します。そのことを広く知ってもらい、守っていくことが坂戸市の発展につながれば素晴らしいことではないでしょうか。

野鳥名	頻度	野鳥名	頻度	野鳥名	頻度
ハシボソガラス	185	マガモ	33	キレンジャク	3
キジバト	185	コサギ	33	マヒワ	3
スズメ	185	ノスリ	33	ミヤマホオジロ	3
ヒヨドリ	183	オオヨシキリ	33	オシドリ	2
ハシブトガラス	182	イカル	33	オカヨシガモ	2
カルガモ	181	クイナ	32	ヒメアマツバメ	2
シジュウカラ	178	チョウゲンボウ	32	ツミ	2
ホオジロ	169	シロハラ	32	サシバ	2
カワウ	164	トビ	30	オオルリ	2
コゲラ	161	キセキレイ	30	ウソ	2

ムクドリ	157	タヒバリ	25	トモエガモ	1
ウグイス	154	アカゲラ	24	キンクロハジロ	1
コジュケイ	152	オオバン	21	スズガモ	1
アオサギ	149	アカハラ	20	チュウサギ	1
カワラヒワ	148	コチドリ	17	ヒクイナ	1
ダイサギ	143	クサシギ	17	カッコウ	1
モズ	140	タシギ	15	ムナグロ	1
ハクセキレイ	131	アオゲラ	14	キアシシギ	1
セグロセキレイ	121	ササゴイ	13	ツルシギ	1
カワセミ	119	カケス	13	ミサゴ	1
カイツブリ	104	アトリ	13	フクロウ	1
メジロ	101	ゴイサギ	12	アリスイ	1
キジ	98	ホトトギス	12	ヒガラ	1
ツバメ	96	イソシギ	12	コシアカツバメ	1
シメ	92	セッカ	12	エゾムシクイ	1
ツグミ	90	ハヤブサ	10	コサメビタキ	1
アオジ	89	オナガガモ	9	ビンズイ	1
エナガ	83	オオジュリン	9		
コガモ	80	ヒドリガモ	8	亜種	
カシラダカ	76	ノビタキ	7	ハチジョウツグミ	1
ヒバリ	73	ツツドリ	6		
バン	71	ヒレンジャク	6	外来種	
イカルチドリ	69	ハシビロガモ	5	ガビチョウ	164
ジョウビタキ	69	エゾビタキ	5	カオグロガビチョウ	47
オナガ	67	キビタキ	5		
オオタカ	57	アマツバメ	4		
ベニマシコ	49	ハイタカ	4		
イワツバメ	44	センダイムシクイ	4		

観察種数（観察で見つかった種の数・参考値）

第19回	2005年1月12日	44種	第87回	2010年9月8日	17種
第73回	2009年7月8日	16種	第139回	2015年1月14日	45種
第81回	2010年3月10日	47種	第182回	2018年8月8日	15種
延べ参加人数 2970人 1回/月					



■ 参 考

この記事は、環境学館いずみでこれまで行ってきた観察会・講座の成果に基づいています。

時期	観察会・講座の名称	講師
平成 27 年 3 月 15 日	高麗川の未来を考える 「高麗川の野鳥」	高麗川ふるさとの会 坂口 稔
平成 28 年 3 月 13 日	同上	同上
令和 元年 9 月 13 日	高麗川ふるさとの会 坂口稔氏へのインタビュー	同上

(小西)

観察の一コマ（色違い）



モンキチョウとモンシロチョウではなく、2匹ともモンキチョウです。モンキチョウのメスは黄色と白色がいます。モンシロチョウとの区別が難しいですが、モンシロチョウは黒の部分に白の班が入ることはありません。



セグロセキレイは在来種で主に川にいます。ハクセキレイは北から進出してきた種で街中でも見かけます。2種は似ていますが、さえずり方も違い、意思疎通ができないそうです。もちろん仲は良くありません。

5.2.3 虫たち

■ お勧めのポイント

野鳥の観察地として有名ですが、昆虫の観察にも適しています。メインの水路沿いの遊歩道の他に、高麗川沿いや河畔林の中にも遊歩道があり、四季を通じていろいろな虫が観察できます。

特に絶滅危惧種のウラゴマダラシジミは、食樹のイボタノキが林内いたるところにあるため個体数も多く、他の観察地に比べて容易に観察できます。



■ 春の虫たち

毎年5月の連休前後にウスバシロチョウが姿を現します。成虫はこの時期しか出現しないのでお見逃しなく。

また、数は少ないですが、ヤマトシジミやツバメシジミに混じってトラフシジミがヒメジョオンの花を訪れます。

■ 夏の虫たち

初夏の一時期浅羽ビオトープを歩けば、ウラゴマダラシジミを観察できます。ポイントは食樹であるイボタノキの花です。成虫はよくこの花に集まります。

夏になると高麗川沿いの道には、クズの花がたくさん咲きます。この花を丹念に探してみると、見事な保護色により花と同化した、ウラギンシジミの幼虫を見つけることができます。

また、この時期はコヤマトンボが縄張りを作っていて、高麗川本流を行ったり来たりしています。

そして高麗川の堤防を歩けば、桜堤公園同様キリギリスの声があちこちから聞こえてきます。

■ 秋の虫たち

秋の虫の代表は浅羽ビオトープでも赤トンボの仲間です。やはりアキアカネがほとんどですが、他にマユタテアカネやミヤマアカネ、ノシメトンボなども観察できます。

チョウで目立つのはウラギンシジミです。夏にも羽化しますが、秋の方が個体数は多くなるようです。

① ウスバシロチョウ



② トラフシジミ



③ ウラゴマダラシジミ



④ ゴマダラチョウ



⑤ コヤマトンボ



⑥ ヒメサナエ



⑦ ウラギンシジミ (メス)



⑧ ウラギンシジミ幼虫



⑨ アカタテハ



⑩ マユタテアカネ (オス)



①ウスバシロチョウ

シロチョウの名前がついていますが、アゲハチョウの仲間です。食草はムラサキケマンですが、ウスバシロチョウの羽化する5月初めには既に成長を終えて地上に姿はありません。そのため、地面に落ちている枝などに産卵します。

②トラフシジミ

春と夏に羽化します。模様は一緒ですが翅の地色が違います。浅羽ビオトープではヒメジョオンの花によく集まります。

③ウラゴマダラシジミ (県VU)

ちょうど食草のイボタノキの花が咲く5月下旬～6月初旬に現れます。止まるときはほとんど翅を閉じていて、なかなか開いてくれません。

④ゴマダラチョウ

外来種のアカボシゴマダラと食樹が同じエノキなので、競合が心配されます。

⑤コヤマトンボ

写真の複眼は茶色ですがこれは未成熟の個体で、成熟するとオニヤンマのようにエメラルドグリーンに輝きます。

⑥ヒメサナエ (県NT1)

浅羽ビオトープでは、高麗川に近い河畔林の中の遊歩道で観察することが多いです。

⑦⑧ウラギンシジミ

幼虫は葉よりもクズなどのマメ科の花を好んで食べます。オスとメスで翅の色が違います。オスは橙色、メスは水色です。

⑨アカタテハ

よく似た仲間にヒメアカタテハがいます。ヒメアカタテハより個体数は少ないようです。

⑩マユタテアカネ

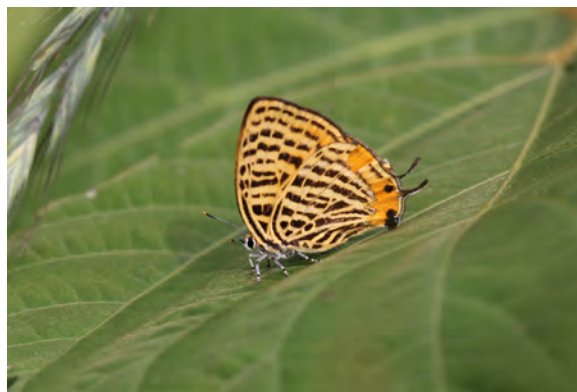
赤トンボの仲間です。秋のトンボですが羽化は意外と早く、7月初めには観察できます。

コラム 森の妖精ゼフィルス

ゼフィルスとは、木の上を生活の場としているシジミチョウの一群で、ギリシャ神話の中の西風の神ゼピュロスが語源です。埼玉県 of チョウ「ミドリシジミ」のように、オスが金緑色に輝く美麗種が多く、森の妖精とも言われています。坂戸市内では下の4種が観察できます。普段は木の高いところにいるのでなかなか目につきませんが、朝早い時間に行くと、下草などの低いところに降りてきていることがあります。



アカシジミ



ウラナミアカシジミ



ミズイロオナガシジミ



オオミドリシジミ

南からの使者あらわる

毎年夏になると、市内各地に突然トンボの群れが現れます。このトンボはウスバキトンボとって、南の暖かい地方で羽化した個体が、発生を繰り返しながら北へ分布を広げていきます。坂戸あたりでは早い年には6月中に姿を見せます。さて、どんどん北へ分布を広げていくウスバキトンボですが、多くの地方では冬の寒さに耐えきれず、冬を越すことができません。それでも毎年毎年同じことを繰り返しているのです。



ウスバキトンボ

(河合)

5.3 泉町桜堤公園付近

■ 行き方

所在地：坂戸市泉町～伊豆の山町

電車：東武東上線北坂戸駅・徒歩 15 分

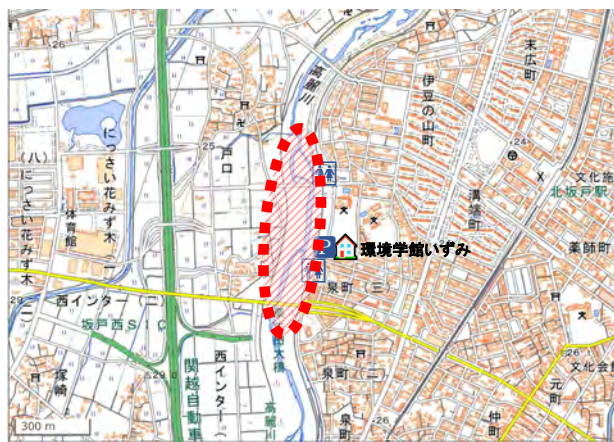
バス：さっかちバス 桜小学校入口（さかど線）

車：坂戸スマート IC から 3 分

駐車場あり。（環境学館いずみ裏）

トイレ：公衆トイレあり。

■ 案内図



■ 魅力

高麗川は、秩父の沢水と台地の湧水に恵まれ、昭和 40 年代（1960 年代）までは子供たちが泳いだり、魚取りをする姿がたくさん見られたそうです。今は、水量が減ってしまい、泳ぐ場所はありませんが、実はまだたくさんの魚たちに出会えます。土手や河畔林には蝶やトンボが居ます。大きな魅力は湧水に恵まれた高麗川を気軽に体感できることです。つまり、水がきれいです。

泉町桜堤公園周辺の高麗川は、川に入りやすく、子供でも魚とりや虫とりをしやすい場所で、交通の便も良いので気軽に楽しめるのが魅力です。



戸口橋から上流を望む(春)

5.3.1 水の中の生きもの

■ お勧めのポイント

湧水があり、夏に冷たい高麗川の澄んだ水は気持ちがいいです。童心にかえって魚と遊べます。

岸辺の水際にはアブラハヤ、ムサシノジュズカケハゼ、カワリヌマエビ、川の流心の石ころ河床ではカジカに出会えるかもしれません。

タモ（玉網）をもって、出かけましょう。



① 湧水の川（川霧）

写真提供 池辺悠子



② 魚とり



③ アブラハヤ



④ ムサシノジュズカケハゼ



⑤ オウミヨシノボリ



⑥ カジカ（大卵型）



① 湧水の川

湧水を岸边から確認できるのは、晩秋と早春の夜明けです。川の水面から湯気の漂う川霧は、暖かい湧水が、冷たい外気に当たり発生するものです。11月となると、高麗川の水温は5度を下回るところもあり、湧水は16度程度と圧倒的な温度差です。一方、夏でも、湧水のおかげで水温が大きく上昇することはありません。岸边付近の砂地を見ると実際に湧いている湧口も見つけられます。魚たちにとって、水温はとても大事なようです。湧水がないと棲めない魚が多いのが、高麗川の特徴です。

② 魚とり

私たちが年に1回、7月に魚取りをします。漁業権が設定されている高麗川でも子供がタモ（玉網）を使ってとるのは問題ありません。岸边の草むらにタモを立て、足で踏みながら誘い込みます。川の中では、大きめの石の下流側にタモを立て、同様に誘い込みます。お子さんと一緒に時間の経つのを忘れましょう。

ここでは、タモで取れる魚を主に紹介します。

③ アブラハヤ

ぬるっとした体からアブラハヤと呼ばれています。触ってみてください。体長3～8cm程度です。ツルヨシなどの中に群れているので、タモに入りやすいです。黒い帯があるものとこれが明確でないものがありますが、胸ひれの根元がオレンジ色なのが特徴です。水温が高くなるのは苦手で、綺麗な清流にしか棲めません。

④ ムサシノジュズカケハゼ（国 EN）

坂戸市の魚を決めるとしたらこの魚です。湧水がないと産卵できない魚です。お腹に数珠が並んでいるように見えるのでこの名前がつけました。体長は3～5cm程度です。5月に産卵をしますが、この時期にオスではなく、メスが派手な婚姻色を出す点が変わっています。普段は浅瀬の砂に潜って生活します。この魚がいなくなったら湧水がなくなったことを意味し、それは高麗川が高麗川でなくなったことを意味します。観察を続けるためにも魚取りをしましょう。

⑤ オウミヨシノボリ（※以前のトウヨシノボリ）（国内外来種）

ジュズカケハゼと同じぐらいの大きさですが、ヨシノボリは目の前に赤いバンドがあります。在来種のクロダハゼも居たかと思われませんが、今ではアユなどの放流で紛れ込み居ついたものが主と考えられています。多くのヨシノボリとは違い、子供は海に下りません。水田の引水でドジョウやメダカと一緒に水田で成長する姿も見られるようです。腹びれが吸盤状に変化しており、葦に登ったり、堰も上がることができます。

⑥ カジカ（大卵型）（国 NT）

カジカは、有名な魚ですね。本来、もっと山奥の清流にいる魚です。なぜ、高麗川にいるか。一つには、坂戸が秩父の溪流に近いこともありますが、山奥の川と同じような環境を持っているからです。地元の60才台後半以降の方はカジカの卵取りをした経験があるようです。カジカは、ムサシノジュズカケハゼに比べるとずっと大きく、取れた時には思わずニヤリとなります。川を中心の流れの早いところの石の下を狙いましょう。

※）トウヨシノボリは。元はクロダハゼとも呼ばれ、最近の研究でいくつかに分けられました。当地のものはオウミヨシノボリのようなようです。

⑦ ヒガシシマドジョウ



⑧ スナゴカマツカ



⑨ ニゴイ



⑩ ギンブナ



⑪ タモロコ



⑫ カワリヌマエビ

写真提供 渡辺昌和



コラム 魚の目から見た高麗川

高麗川は急激な増水がある川で、本来、河床が安定せず、出水のたびに石がこすれ合い、川底の石には藻が少なく、泥も少ない砂利川です。周辺が台地となっているので、河床からの湧水が多いです。こんな環境が好きで棲んでいる魚が多いです。

ところが最近では、水量が減って、大水も少ないので、砂利の河原から草の河原になり、泥が貯まった川底では藻が多くなり、水温が上がってきました。温暖化がいち早く来ています。また、子育てや大水の時に逃げ込む支流もコンクリートで固められ困っています。

⑦ ヒガシシマドジョウ

ドジョウと言えば、田んぼや泥の水路にいるのを思い浮かべませんか。シマドジョウは清流の砂地が大好きなドジョウです。このため、明るい色をしています。小さめで、スマートです。湧水のあるところに集まります。砂に潜っているので、しっかりとタモを川底に付けて取りましょう。

⑧ スナゴカマツカ

馬ずらでちょっとひょうきんな感じでハゼにも似ていますが、コイ科の魚です。7月の魚とりの講座で必ず1~2匹つかまりますが、移動するので時期によっては居ません。一般には馴染みのない魚ですが、結構いるそうです。砂地が好きで、砂に潜っているので、そこをタモで狙います。

⑨ ニゴイ

全長は最大60cmになるそうですが、私たちが見ているのは5~12cm程度です。コイというより、カマツカに似ています。最近、減少する魚が多い中で、ギンブナと同様に増加傾向です。水温上昇、泥底化が有利に働いている魚と考えられます。

⑩ ギンブナ

キンブナは、昔はマブナ釣りの対象魚で、高麗川では、用水路や小さな支流で多く見られましたが、今では少なくなっていました。一方、ギンブナは増加傾向です。私たちの講座でも取れます。ただ、キンブナとの交雑などのためか場所によって銀色であったり、金色であったり、しっぽの長いので、よくわかっていない魚です。

⑪ タモロコ (国内外来種)

モツゴ (クチボソ) と似て、体長3~6cm程度、体側には同様に太い黒帯がありますが、ひげがあり、尾びれの根元に黒い点があります。琵琶湖産アユの放流に混入して定着したそうです。

⑫ カワリヌマエビ (シナヌマエビ 国外外来種)

ヌカエビ (県NT2、右下写真) を紹介したかったのですが、今はほとんど取れなくなってしまいました。カワリヌマエビはペットショップでミナミヌマエビとして売られていますが、実は外来種です。繁殖力が強く、ヌカエビを駆逐し続けています。ヌカエビの方がやや小さく、腰が鋭角に曲がっている、額角の鋸歯が少ないなどの違いがありますが、専門家でないと区別がつかないです。カワリヌマエビは必ずタモに入ってくるエビです。家に持ち帰って水槽で飼ってみてはどうでしょうか。高麗川周辺には、この他にスジエビ (通称川エビ) もいます。こちらと同じくらいの大きさで、区別が付きにくいですが、テナガエビの仲間なので、比べると手足が長いです。



ヌカエビ 写真提供 渡辺昌和

コラム 川魚の生い立ちと高麗川に棲んでいる魚

日本の川魚は、200種を超えます。本州だけでもほぼ100種です。狭い国土からは考えられないほど多種の魚が棲んでいます。これは、日本列島の気候や成り立ちによるものです。

川の魚は、一生を川で過ごす純淡水魚と一生の一部を海で過ごす両側回遊魚に分けられます。純淡水魚は、地球上で繰り返された氷河期と弧状列島の誕生に伴う水の流れの変化に応じて、生息域の条件や生存競争を乗り越えて、今、それぞれの地域に棲んでいます。秩父の山を取り巻く丘陵地ができ、坂戸台地ができ、川越まであった古東京湾も退き、そんな中で今の川魚たちは子孫を残してきました。

魚たちは、陸地を歩くことはできませんので、みんなその土地の原住民です。独自に進化を続けています。このことが、他の動植物とは違うところです。

では、高麗川ではどうなっているのでしょうか。

渡辺昌和先生の調査（1983～2015年調査結果）では、高麗川の主に坂戸市内にいる魚は、高麗川を代表する魚、その他の地元魚、国内外来種、国外外来種に分けて、以下のようになっています。

昔は、高麗川の橋のたもとには、川魚料理屋さんがあり、アユ、ウグイ、ウナギなどを捕る漁師さんもいたそうです。最近は釣り目的などで外来種を放流され、困っています。また、アユなどの放流に混じって色々な国内外来種が入っています。

関東地方と東北地方の太平洋側は魚種が元々少なかったところでした。高麗川も元は20種強、ところが今は以下のように倍以上の種類が確認されています。今、川の中ではどんなことが起きているのかを想像すると、元からいた魚と新参者との生存争いです。カワムツが爆発的に増えてアブラハヤ、ウグイが減っています。オオグチバスやブルーギルの問題は周知の通りです。また、カワリヌマエビに押されてヌカエビも減っています。

高麗川を代表する魚	その他の地元魚	国内外来種	国外外来種
アブラハヤ、ウグイ、カマツカ、ニゴイ、キンブナ、ギンブナ、ドジョウ、シマドジョウ、ホトケドジョウ、ギバチ、クロダハゼ、ムサシノジュズカケハゼ	ヤマメ、カジカ（大卵型）、アユ、オイカワ、モツゴ、ウナギ、〔メダカ〕	ワカサギ、ヌマムツ、カワムツ、タモロコ、ゲンゴロウブナ、コイ、ヤリタナゴ、カネヒラ、アカヒレタビラ、アブラボテ、ナマズ、トウヨシノボリ、メダカ	ニジマス、キンギョ、タイリクバラタナゴ、カラドジョウ、カムルチー（雷魚）、オオクチバス、コクチバス、ブルーギル

〔 〕は昔から地元にいたが、最近のものは国内外来種。

■ 参 考

この記事は、環境学館いずみでこれまで行ってきた観察会・講座の成果に基づいています。

時 期	観察会・講座の名称	講 師
平成 22 年 8 月 22 日	高麗川の魚～豊かな清流の住人	京華中学・・・教師 渡辺昌和
平成 24 年 6 月 15 日	ジュズケハゼを観察する	同上
平成 25 年 7 月 28 日	高麗川の魚	同上
平成 26 年 8 月 24 日	高麗川という川はどんな特徴の川か	同上
平成 27 年 1 月 25 日	日本の川を知り、高麗川を知る	同上
平成 27 年 5 月 10 日	越辺川を歩く	同上
平成 27 年 8 月 23 日	今、高麗川で動向を注目すべき魚	同上
平成 28 年 8 月 21 日	メダカのがっこう～知られていないメダカの不思議	同上
平成 29 年 8 月 20 日	高麗川の魚	環境総合研究所 栗原 敏明

参考資料：

- 1) 渡辺昌和+坂戸自然史研究会、魚の目から見た越辺川、2000 年発行
- 2) 渡辺昌和、図説 川と魚の博物誌、1999 年発行
- 3) 渡辺昌和・伊地知英信、めだかの冒険、2007 年発行
- 4) 坂戸市環境学館いずみ、高麗川の魚たち、平成 29 年版

(稲垣)

観察の一コマ(哺乳類)



イタチです。魚を捕ったようです。川の近くで時々出会います。ふさふさの毛並みがかっこいいです。逃げますが、遠くでこちらを振り返るので見続けましょう。



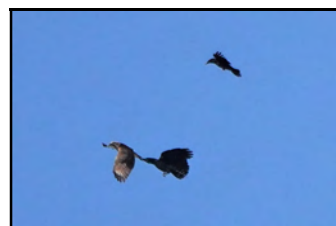
指の長い足跡です。最近増えて困っているアライグマです。下はたぶんタヌキ。姿も時々見ます。水辺の泥のところには色々な動物の足跡があります。彼らの生活を垣間見ることができます。

コラム 鳥の羽ばたき

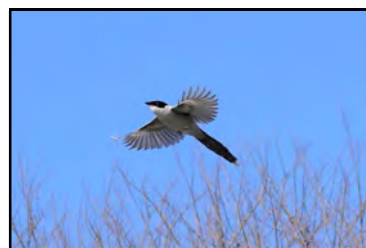
写真は新しい発見をする良い道具です。



ムクドリのねぐら入り（数百羽の群れ）



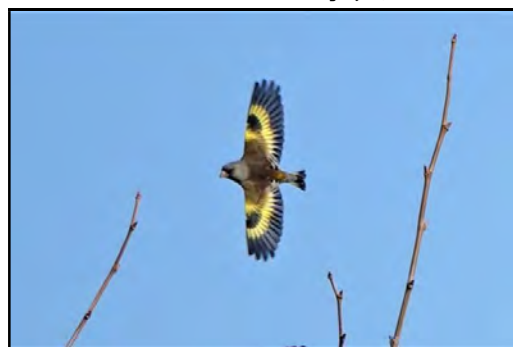
カラスとノスリの攻防



オナガ



モズ



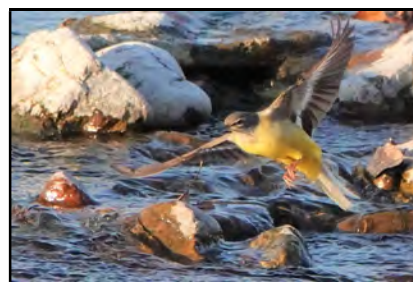
カワラヒワ



カワセミ



オナガの水浴び

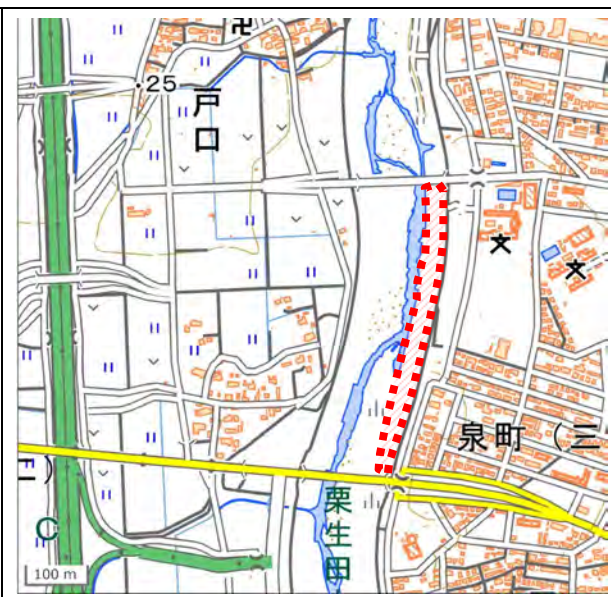


キセキレイ (小西)

5.3.2 虫たち

■ お勧めのポイント

高麗川堤防の上が遊歩道になっていますが、堤防を下って高麗川に近づいた方が、いろいろな虫たちを観察できると思います。春先など川の近くを歩くだけで、羽化したばかりのサナエトンボの仲間が足元から飛び出てきます。市街地のすぐそばなのに、絶滅危惧種の虫も見つけられる貴重な場所です。



■ 春の虫たち

高麗川で春一番に姿を見せるのがモンキチョウです。その中でも泉町桜堤公園付近で羽化するモンキチョウが一番早いと思います。早い年には2月の始めには飛び始めます。

そのあと、モンシロチョウやスジグロシロチョウなどが姿を現し、春の主役ツマキチョウもいっしょに飛びだします。

他にもベニシジミやツバメシジミなどのシジミチョウの仲間やキアゲハなどのアゲハチョウの仲間も少し遅れて姿を見せてくれます。

そして数は少ないですが、絶滅危惧種のギンイチモンジセセリもいっしょに観察できます。ギンイチモンジセセリは夏にも羽化します。

■ 夏の虫たち

滝不動や浅羽ビオトープには及びませんが、ここでも少ないながら絶滅危惧種のアオハダトンボが見られます。初夏の一時期だけなので見逃さないようにしましょう。アオハダトンボが姿を見せなくなったと思う頃、ハグロトンボが飛び出します。また、コオニヤンマの悠然と飛ぶ姿も、高麗川沿いで見られると思います。

そして、堤防ではキリギリス（絶滅危惧種）の声があちこちから聞こえてくるし、運が良ければコムラサキも観察できるかもしれません。

■ 秋の虫たち

夏から秋にかけて、高麗川ではバッタの仲間をたくさん観察できます。その中でぜひ見てもらいたいのがショウリョウバッタモドキです。泉町桜堤公園付近の高麗川堤防で見られるバッタで、絶滅危惧種に指定されています。

また、秋の主役アカトンボの仲間も見られますが、泉町桜堤公園付近ではアキアカネがほとんどです。

① モンキチョウ (オス)



② ツバメシジミ (オス)



③ ギンイチモンジセセリ



④ コムラサキ (オス)



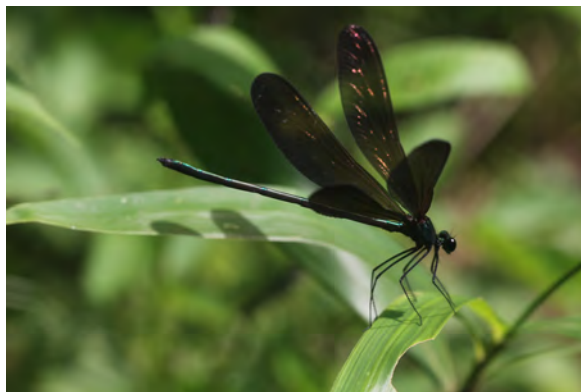
⑤ ヒガシキリギリス (オス)



⑥ コオニヤンマ



⑦ ハグロトンボ



⑧ ヒメウラナミジャノメ



⑨ ショウリョウバッタモドキ (オス)



⑩ アキアカネ (オス)



① モンキチョウ

オスの翅は黄色でメスは白色ですが、メスの中には黄色い個体もいるのでなかなか見分けが付きません。

② ツバメシジミ

写真で見る通りオスはメタリックブルーに輝く美しい翅ですが、メスは地味な黒褐色です。それでもよく見るとオスに負けないくらい美しい個体もいます。高麗川では普通に見られるチョウです。

③ ギンイチモンジセセリ (国NT、県NT2)

セセリチョウの仲間はどこも地味なチョウが多く、本種も翅の表は茶褐色一色の目立たないチョウです。でも、写真で見るように裏は名前の由来となっている銀の一文字が目立ちます。ガの仲間と勘違いしている人もいるかもしれませんが、チョウの仲間です。

④ コムラサキ

高麗川から越辺川にかけて広い範囲に分布していますが、個体数は少ないようです。オスの翅は光線の加減で紫色に輝きますが、残念ながらメスは輝きません。

⑤ ヒガシキリギリス (県NT1)

夏に高麗川の遊歩道を歩いていると、あちこちから「チョンギース」と鳴き声が聞こえてきます。でも、姿を見ることはなかなか難しく、堤防の草むらを丹念に探さなければなりません。

⑥ コオニヤンマ

名前にヤンマが付いていますがヤンマの仲間ではなく、サナエトンボの仲間です。高麗川では比較的個体数が多く、夏の間いろいろな場所で観察することができます。

⑦ ハグロトンボ

夏の高麗川を代表するトンボです。城山から泉町桜堤公園まで見られる範囲も広く、初夏にアオハダトンボが姿を消したあと姿を見せ始め、秋まで長い期間観察できます。

⑧ ヒメウラナミジャノメ

高麗川で見られるチョウの中では、このチョウがもっとも個体数が多いのではない

でしょうか。このチョウも地味な外見からガと勘違いしている人がいるようですが、チョウの仲間なのでお間違えなく。

⑨ショウリョウバッタモドキ（県NT1）

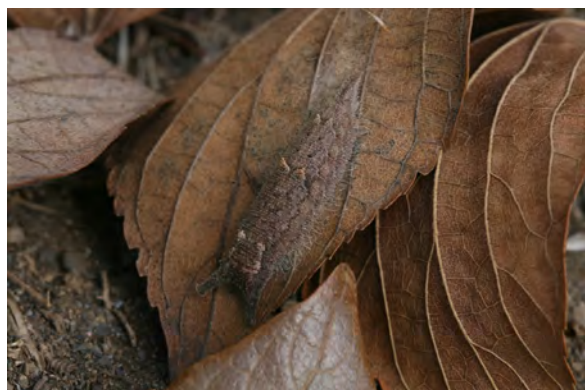
ショウリョウバッタに似ているのでこの名があります。ショウリョウバッタより小さく、飛び方も弱々しい感じです。

⑩アキアカネ

初夏に羽化したあと、しばらくして山の方へ移動し、秋になるとまた元の場所に戻ってきます。戻ってくる時は単独ではなく群で戻ってくるので、急に赤とんぼの集団と出会うこととなり、びっくりさせられます。

コラム 虫たちの冬越し

寒い冬は虫たちにとって大変厳しく、その間活動を停止します。つまり冬眠です。その状態は卵、幼虫、蛹、成虫とさまざまで、越冬対策も種によってそれぞれ違います。



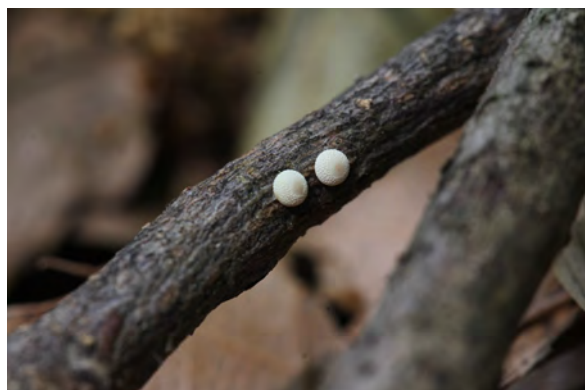
ゴマダラチョウ幼虫

食樹のエノキの落ち葉の下で越冬



コムラサキ幼虫

食樹のヤナギの幹の割れ目に隠れて越冬



ウスバシロチョウ卵

枯れ枝などに産卵し、そのまま越冬



ツチイナゴ

成虫で越冬

(河合)

6. 越辺川水系小沼

■ 行き方

所在地：坂戸市大字小沼 飯盛川河口馬頭観音
 電車等：東武東上線「若葉駅」乗換え、
 東武バス「天神橋下」徒歩 25 分
 さかっちワゴン「ことぶき荘」徒歩 10 分
 車： 圏央道 坂戸 IC 5 分 駐車場なし。
 トイレ：公衆トイレなし。

■ 案内図



■ 魅力

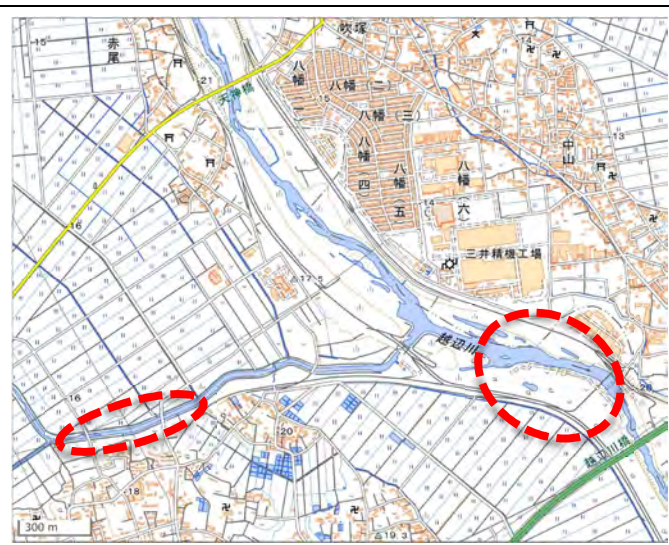
高坂橋より下流の越辺川沿いには、島田、赤尾、小沼、横沼、紺屋と田んぼが広がっています。小沼の飯盛川河口周辺の土手を歩くと田んぼの奥に秩父の山並み、富士山が望めます。飯盛川の新河口には中州があり、冬はコハクチョウやオナガガモが羽を休めています。旧河口は入り江になっており、カモ類の隠れ場所になっています。「ピーッ」という甲高い声とともに青い背中のカワセミが越辺川を渡っていきます。初夏、カワセミ親子に出会えるかもしれません。新河口の下流は、オギ原、ヤナギ、エノキ、クヌギの充実した河畔林が続いており、ウグイス、モズ、ホオジロなどが一年を通して見られます。ツグミ、アオジ、カシラダカが越冬し、キビタキ、オオルリなどの夏鳥が河畔林を通過していきます。2 時間歩けば、30 種類以上の野鳥に出会うことができる気持ちのいい探鳥地です。



6.1 植物

■お勧めのポイント

越辺川は肥沃な平野-水田耕作地を涵養しましたが、大小河川の合流部を中心に堤防決壊や越水・逆流による水害が多発する氾濫原を作ります。このような地理的自然と人為的自然を背景に河畔植生が成立していることを忘れて、植物もその保全も語ることはできないでしょう。自然の営みの中でたくましく生きている植物を観察ができる場所です。



■景観と河畔の木

八幡橋・・・坂戸小沼地区と川島町をつなぐ「冠水橋」 左方に圏央道の「越辺川橋」

■八幡橋



① ハンノキ



② ヤナギ類



③ クヌギ



①ハンノキ カバノキ科・・・空を紅に染める、早春に開花の光景

全てを押し流す程の大氾濫後に最初に林を作るパイオニアです。水湿に強く、根粒菌と共生するので、江戸時代に肥料木として推奨され、秋には稲架木（はざき）として利用されました。河畔域周辺にこの植栽種の子孫が残る。県の蝶ミドリシジミの食草とし